

私の人生模様

東京都 清水和子

私は、満州の大石橋で大正十四年七月三十日に生を受け、昭和の年数と共に年齢を重ねて来ました。私の祖父が、昭和大志を抱いて渡満したのは明治三十八年で、父が八歳、下に弟が二人いて、五人家族で故郷の大阪を捨てて、満州の大石橋に行き満鉄に入社しました。

渡満後、三人の女の子が生まれ、祖父の一家は男子三人、女子三人の八人家族になっていました。父も長ずるうちに、進学などは経済的に無理と思ひ、祖父と同じく満鉄に入社しました。祖母は三女を出産後、病気でこの世を去りました。残された末の子は、父とは二十三歳もの年齢差、女手がないので父は間もなく結婚し、私の兄が一年後に出生、叔母になる父の妹とは一年しか年が違いませんでした。

兄の母は、大家族の生活の中で苦勞も多かったの

しょうか、兄が二歳半になったところに病気で亡くなり、そして私の母が後妻として迎えられたのです。

二男六女の長女として生まれた母は気丈で、嫁に来ても大家族の世話をし、私が生まれ、そして一年五カ月後には次男、五年後には三男を産み、家族が増えていきました。

やがて父の弟は、東京で苦学しながら大学に通い、末弟は故郷の大阪で職に就くといった具合で独立していききましたが、男が多くて日常生活もにぎわしくなってきました。

そのころ、関東州の外れの普蘭店楊樹房（正式な地名は、普蘭店管内朝陽寺会楊樹房屯）という田舎で、果樹園経営の入植者を募集していましたが、祖父と父はそれに応募し、私が五歳の春に移り住みました。

そのとき、同じ満鉄に勤めていたHさん一家も一緒に移り住み、それから親しくお付き合いをしました。

Hさん一家も我が家と共通点があり、先妻さんが女の子二人を残して亡くなったので後妻さんがきていました。後妻さんには私と同年の女の子、三歳下にまた女

の子と六人家族でした。Hさんにはそれなりの事情があったのですが、後日、私と同年のS子さんを故郷の広島に養女に出してしまい、淋しかった思い出があります。Hさんには楊樹房に住んでから二人女の子が生まれ、昭和十七年にやっと待望の男子が生まれました。

楊樹房は普蘭店から約四、五キロほど離れ、北に向かつて広がっている農村で、私たち入植者が移住するまでは、日本人はいませんでした。当時は農事会社の職員一家と、我々入植者八軒で人口四十八人ぐらいの淋しい農村でしたが、次第に子供が増えて、終戦時には総人口六十人ぐらいになっていました。我が家は、広い敷地に二軒分の家、うち一軒は祖父所有のもの、果樹園も二世帯分で十三町歩はあったとか。かなりの借財だったでしょう。広さは十分過ぎますが、電気がなく照明は石油ランプでした。毎日、火屋をきれいにふかないと炎のすすで明るさが半減、火屋ふき手入れは日課のようでした。

家の暖房は朝鮮伝来のオンドルと、だるまストー

ブ、夏は雨期がないので湿度が少なく、窓を開けておくと自然の風も心地よく、日本で感じる蒸し暑さはなく、過ごしよい夏でした。

やがて私も、学齢期を迎えるようになり、普蘭店の尋常小学校まで通学です。四、五キロの普蘭店までの通学の足は箱型の馬車で、中国人の車夫が二頭立ての馬を手際よく扱いながら小学校の校門前まで運んでくれます。一年生から六年生までの年齢の違った子供たち十人ぐらいが毎日通学しました。帰りもまた迎える馬車が六年生の授業終了時を見計らって校門まで来てくれました。当時、兄が六年生でしたので、兄たちの授業終了時まで、校内で遊んでいました。何をして遊んでいたのでしょうか、覚えがありません。

その馬車も私が四年生になったころから、児童数が増えて送迎しきれなくなつて、鉄道会社と交渉して、朝の登校時に一回と下校時に一回、「ケハ」という一両だけの輸送車を梁家リョウカという保線区の小駅に止めてもらうことになり、汽車通学に変わりました。そのかわり、それに乗り遅れると、なんらかの方法で家に帰ら

ねばなりませんので、ときには友達宅に泊めてもらうことになります。

小学二年生の二学期の終わりごろ、当時、体が弱かった私は、伝染病にかかりやすく、大病をしました。

しょうこう熱になってしまいました。危篤状態に陥ったことを思い出します。この病は余病を併発することが多く、私の場合も腎臓炎とジフテリアを併発、手や足がすっかりむくみ、お小水が出ず、そのうちに喉に灰白色をおびた黄色い義膜ができて、声が全く出なくなってしまうました。冬の寒いころなのに、どこからか西瓜を探し求めて、食べさせてもらいましたが、今でもその味は水気も甘みも減少しておいしくなかったことを記憶しております。またトウモロコシの茶色く枯れた毛を煎じても飲まされました。

当時は病院でも、そんな治療をとりいれていた模様です。大連の赤十字病院からベテランの看護婦さんを特別に付添いに頼んだり、必死の看病手当てをしてもらいました。今の私があるのもあのときの克服、親の真情の賜と心に念じております。

しかし、病気の後遺症は私の声の音域を狭くしてしまい、高音が出なくなり、そのために歌が苦手になって歌の上手な人、美声の人をうらやましく思う現在です。

大病する前の八月に四男が誕生しました。危篤状態から脱したときに、母の背に負われて見舞いに来た弟のかわいかったこと、本当に慰められました。

しかし、その弟は終戦後、医者はいない楊樹房で苦しみ抜いて死んでいきました。病気は何だか今思うと胃ガンではなかったかと思えます。昭和二十年の暮れに、弟自身の口からポロリと出た言葉「来年の節分のころは僕の骨揚げだろう」。何を言うのかと打ち消したい気持ち、しかし病の進行は、予言どおり弟を昭和二十一年二月三日までしか生かしてはくれませんでした。残された者たちは、涙ながらに遺体を清め、永久の別れを惜しんで果樹園の隅に土葬しました。お坊さんがいるわけでもないし、納棺したいと思ってもらえまます。お線香さえも暴動時に暴徒によってどこかに持ち去られて、何の供養の術もない非常事態

のまま、楊樹房の土に返してあげるしかなかったの
した。わずか十二年の短い生涯でした。

一方、私の方はその大病後は生まれ変わったように
丈夫になり、小学六年生までいつも皆勤賞をもらうは
どでした。

まだ果樹園の方は軌道に乗らず、副業に養鶏や養豚
をして生計を維持していました。子供たちはほとんど
成長していきますし、昭和十年に末っ子の妹が生まれ
て、六人の兄弟姉妹になりました。

兄は金州の農業学校に進み、卒業すると今度は私の
進学ですが、楊樹房から大連の女学校に通うのは無理
なので、父の上の妹が卒業した旅順高等女学校に入る
ことになり、当然寄宿舎に入りました。私が二年生に
なると次男が中学校と、両親は子供の教育に追い回さ
れて、厳しい生活を強いられましたようです。

そのころ楊樹房にもやっとな気がくるようになり、
ランプ生活から一歩前進しました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争の勃発。兄は、
前の年に徴兵検査で入営、そしてやがて激しくなる戦

況の中、沖縄へと行ったのでした。

昭和十七年ごろになって少しリンゴもなるようにな
り、借金も少しずつは減りました。とはいっても子供
の成長には追いつかず、三男が進学、私の女学校卒業
も近くなって、親は就職してほしかったのでしょ
うが、女子師範学校への進学があきらめ切れなくて、両
親に進学したいと申しましたら、「もうこれ以上、学
費の送金は無理」と断られました。随分と悩みまし
た。そして担任の教師に相談しましたところ「官費が
支給されるので、学費はその範囲内でやっています
よ」と嬉しい返事。ただし卒業して二年は教師の職を
続けることという条件でした。もちろんこんな時代で
すし、なるべく長く教師を続ける覚悟でした。

また二年旅順に残り、新しい友達もできて学校生活
が始まりました。

女子師範の二年になったときに、今までの女子師範
学校から師範学校女子部となり、男子師範と統合され
て、あちらは男子部と改められました。校舎も旅順高
女校舎内に同居していたものを、別な校舎、寮も移転

し、勉学することになりました。教育実習も先輩方は三学期にしたのに、私どものときは二学期に改められたのです。戦争も厳しくなってきたので、少しでも教育者養成を早めて、いざというときに備えたのでしよう。

二学期の教育実習前に、一年先輩の計報が入ってきました。鞍山曙小学校に赴任したKさんが、空襲で防空壕内で子供たちと一緒に爆死したという内容でした。やはり鉱業地が目標にされるのかと、ショックは大変なものでした。

入植して十三年、我が家の果樹園も成熟期に入り、どんどん出荷可能になり、食糧不足の庶民の栄養補給の一端を担うようになり、父母も精を出していました。私の弟たちも「おやつは？」と言うと「リンゴ食べなさい」と言う具合で、お腹いっぱいになるぐらいよく食べたものです。

やがて次男も学校を出て海軍に入隊し、和歌山県の方に行きました。父の妹たちも、新京で結婚する者や就職する者が楊樹房から離れていき、複雑な家系も私

ども兄弟姉妹だけになり、私と三男、四男、次女の五人家族になりました。昭和十八年ごろのことです。

祖父も間もなくこの世を去り、祖父の家には住む人もありませんでした。土間に機械を据えて、農作業の合間に父がそれをたわし作りに使うぐらいでした。私が旅順高女在学中に、ふらりと我が家に立ち寄った男が、一宿一飯のお礼にとたわし作りを伝授してくれたそうです。結局一カ月ぐらい寝泊まりして機械を置いたまま立ち去ったそうです。

父はその男のことを「青田」と呼んでいました。本当の姓ではなく、「初めて会ったときの印象が青い顔をして今にも死にそうな男だったので、そう呼んでいるのだよ」ということです。彼が立ち去った後、父は「朝陽束子」と赤い帯封を印刷しそれを巻いて大連方面に出荷していました。「人は困っているときには助けてあげるものだよ」と父は述懐していました。

昭和十九年三月、師範学校女子部を卒業した私は、母校の普蘭店国民学校に就職できるものと思っておりましたが、世の中の事情もあってか、各人の希望も無

視された感じで普蘭店管内に六人で配置されました。

大連出身者三人と、香川県小豆島出身者、旅順出身者、そして普蘭店出身者の私の三人です。どのようになり、結局、大連出身のNさんと公学堂に勤めることになりました。大連出身のSさんと旅順附小出身のYさんが国民学校に、小豆島出身のHさんと大連出身のUさんが、少し離れた登沙河公学堂に決まり、各々複雑な思いがあつたことでしょう。

国民学校に決まったSさんは、終戦直後大連に帰省されたはずなのに、同窓会名簿には名前が見つかりません。

私も新米教師四人は南山街の官舎で共同生活をすることになり、当番制で食事を作り、ときどき実家から野菜やリンゴ等運んでもらっていたので、食糧にはそれほど不自由はしませんでした。

公学堂も昭和二十年になると公学校と改められ、朝礼時には「私たちは天皇陛下の御民であります」と唱えさせてから授業を始めました。生徒たちは日本語で

すべての授業を受けるので、語学力の劣つた者はすべての学科でコンプレックスを感じていたと思います。

しかし、戦火厳しくなる一方、授業よりも防空壕掘りが毎日の行事になって、暑い最中に掘るしかありませんでした。

夏休みがやってきました。生徒たちは登校しませんが、教師たちはやはり出勤して戦争の成り行きを不安な気持ちのまま見守るしかありません。ソ連軍の参戦がどう影響するのか、一億国民総玉砕で最後まで戦うことになるのか全く予測もつかない毎日でした。

八月十五日、玉音放送があるということで全員職員室に集合し、聞きにくいラジオから戦争を無条件降伏する旨の陛下のお言葉を拝聴しました。これで玉砕はしなくて済むけれど、一体この満州で日本人居留民はどう生きていくのか全く未知の世相で、不安ばかり募りました。

「日露戦役でロシア軍の降伏後は、行政官庁の業務はロシア側から日本側に平和のうちに引き継がれたという事です」ので、ソ連軍が進駐した後は当分の間、

ソ連の軍政官の命令に従って動くこと、その間の身分や生活は保障されます。今までどおりに動揺することなく自分の業務に励むように」と民政署からのお達しでした。しかし中国人の子弟を教育している公学校の教師は、民政署員と同じという訳にもいきません。動揺があることは間違いありません。

私は、楊樹房という不便な所の人間です。国民学校に通学していた子供たちも、やがて九月になると通学を余儀なくされます。今まで日本の政府に支配されていた中国人たちは、果たして今までどおりの目で日本人の私どもを見てくれるでしょうか。子供たちに危害を加えるかもしれません。役所もその心配はしていません。私に楊樹房学童の一括指導をするようにと通達してきました。そこで南山街官舎での生活にピリオドをうち、荷物をまとめて楊樹房の親元へ帰りました。他の同僚も戦争が終われば夏休み時期なので、ここにいない必要もないので、各々の出身地へと帰って行き、それが彼女たちとの永い別離となりました。分教場式の教育もあまり実施できない中に八月二十五日を

迎えました。

父は用があつて、朝、普蘭店に出掛けていきませんでした。前夜に普蘭店市街で異常が起きていたのも知らずに。そのうちに家で雇っていた中国人たちに流れて来る情報が伝わりました。「旦那さんは帰って来られないかもしれない。普蘭店で暴動がおきて列車は止まらないし、神主さんが刀で切られて危ないらしい」などと。どうしたらよいのか、家にいるのは母、私、第二人と妹の五人。「困ったね」と不安を募らせていました。

時間がどんどん過ぎ、使用人が暴徒やソ連軍が来ると怖いから、どこかに避難した方がよいと言ひ出しました。近所のHさんの裏手に川原があつたので、そこに身の回りの物を少し持って逃げましょうということになり、二世帯は一緒に行動することになりました。Hさんの家は、十七年に生まれた坊やが二歳になった年に当主のHさんが病気で亡くなってしまい、我が家もHさん宅も主人のいない女と子供の家族で心細い思いで逃げたのです。夏の夜のことで、なかなか日が暮

れません。やっと薄暗くなり始めると騒々しい声やバリバリという破壊音が次第に大きくなり、暴徒たちが日本人住宅を襲撃し始めました。そのうちに火の手が上がり暴動は夜明けまで続き、女と子供の二家族は生きた心地がしませんでした。最年少のHさんの坊やを「泣いては駄目よ、声を出したら怖いのよ」と声を押し殺してなだめながら、まんじりともできず全員朝まで隠れていました。どうしてこんな思いをしなくてはならないのと、自問自答しながら父のことも気掛かりだし、再び会うことができるのかと不安でした。

二十六日の朝になると、静かな落ち着いた雰囲気を感じられました。すぐに戻っては危険と、午後三時過ぎに戻ってみると、一夜のうちに我が家の現状は一変していました。

窓ガラスは叩き壊され、戸ははずされ、襖も障子も見る影もありません。荷物もすっかり持ち去られて、これからどうやって生活をしていけばよいのかと嘆きました。天井も槍で突いた穴があちこちにあり、何か隠していないかと刺してみたようです。外に行くあて

もないのでここに住むしかないと思って片付け始めました。そこに父が無事に戻ってきました。早速に戸や窓を応急補修し、なんとか住めるようにし、暫時それぞれの家で暮らすことに話がまとまりました。

しかし孤立した四面楚歌の中での生活は不安であり、また協議の結果大連へ避難するのがよいと普蘭店国民学校に集結したのです。集結したもの、いろいろ思案投げ首、いつ引揚船が出るか見通しが立たないのに、大連で生活するのは早計ではないかとの結論に達し、また楊樹房に戻り、秋の実りのトウモロコシや粟等を食べながら冬を越すことになりました。

その後の生活は、ソ連兵の進駐に女・子供はおおちとしてはおられません。「来るよ」という男の合図で秘密の隠れ場に慌てて逃げ込み、彼らが帰って行くのを息を殺して待ちます。何をやっているのか、ただ声だけが聞こえてきます。「スパシーバー、ハラショー」の他の言葉は記憶にありませんが、これだけはよく話していました。時計や宝石はみんな掠奪して何もないのに、腕にしている時計を見ると欲しがっていたよう

です。やがて手に入れた物を持って帰っていきます。敗戦国の情けなき、哀れさを味わいました。このような日常生活でしたが、周りの中国人も欲しい物はさんざん我々から奪い取って潤っていたので、これ以上取る物もなくあまり害を加えてきませんでした。このうえ命まで取られてはと敷地内での行動ぐらいで全く隣の集落にも出ませんでした。ソ連兵もいつ来るか分かりません。

農事会社の職員の方は、終戦直後大連に移転していたのか、私が公学校の職員を辞して帰宅した時には、もう空き家だったと思います。一緒に避難した記憶がありません。朝陽寺に警察官の家族がいました。まだ若い方なので二歳の男児、一歳の女兒と四人家族でしたが、幸いなことに何ら被害も受けず無事だったそう。寒さに向かう時期、私の家族の布団がないので持つてきてくださいました。果樹園入植者が楊樹房にて越冬するということで、警察官一家も朝陽寺の官舎で過ごすことになりました。秋になりましたが、今まで雇っていた中国人にそのまま無報酬で働いてもらうわ

けにもいきません。農耕用のラバ三頭、粉ひき用のロバ一頭を馬小屋につないであつたのも盗まれて、豚や鶏も全部行方不明、収穫できる穀物、粟、高粱、トウモロコシ等人手で少しあて収穫するしかなく、糶摺りや粉ひきは大変でした。必要なだけ作るしかありませんでした。畑の作物は、近所の中国人が少しずつ失敬していくらしく、段々に減っていくのが目につきましたが、立場が逆転した今、忍の一字でした。

ソ連兵も相変わらずで、私はいつそ坊主頭にしてしまおうかと考えたこともありました。

坊主頭といえ、夏の暑い最中、洗髪もできなくて頭に虱がわいたことがあり、父が農薬で頭を洗えば虱も死ぬだろうと洗ったところ、虱は退治されましたが、頭皮がかぶれて長い間苦しんだ覚えがあります。終戦から十日後の普蘭店市街地の暴動は、筆舌に尽くし難い残酷なものであつたそうです。普蘭店におられた吉田良夫さんが、後日その様子を語っておられました。

民政署員や警察署員で暴徒に襲撃されて亡くなった

方があり、さらに魏子窩から治安警備の応援にきた人も三人殉職されたということでした。一般の方でも、中国人住宅街に家を持っていた人は悲惨な最期を遂げられたそうです。子供を背負って逃げる途中で、中国人の刀によって子供が刺されてもそれに気付かず、避難所で初めて背中の子供の死を知ったという悲劇もあったそうです。また、市外で生活していた人が夜襲を受けて、近くのトウモロコシ畑に二家族で逃げ込んだけれども、子供が恐怖のあまり泣き出し、泣き声を聞いた暴徒が「日本人がいるぞ」と騒ぎ立て、四方八方から投石し、畑の中を逃げ回っても、子供の泣き声が目標になり執拗に追ってくるので、切羽詰まった絶望感から子供の首を絞め逃げようとしたとか、悲惨な事実が数えられないほどあったということです。

普蘭店の方々は一度国民学校に着の身着のまま集結し、無蓋貨車で大連に避難しましたが、集結までの恐怖状態は枚挙にいとまがないようです。

普蘭店管内に、三十里堡という地があり、約三百人の日本人が居住し、果樹栽培が盛んで、日本人農園も

十五、六戸ありました。やはり楊樹房同様に、学童は普蘭店小学校に汽車通学をしていましたが、いつごろからか分校ができたとのことです。その三十里堡は、幸いにも暴動がなく、大連港から引揚げが開始されるまでそのままの生活が続けられたそうです。

普蘭店で忘れられない人がいました。親日家の劉雨田さんです。

劉さんは、日露戦争で日本軍の作戦に協力、その功績により日本国籍を得て、後に陸軍大学の中国語教官をされ、第二次世界大戦では個人で軍用機を献納されたほどの親日家でしたが、暴動で惜しくも命を落とされました。日本のために尽くしてこられた生涯を思うと、本当にお気の毒です。劉さんの家は暴動の最も激しかった地区だったので、日本人同様に暴徒から迫害されたらしいのです。ご子息は大連一中から宇都宮高等農林学校を卒業されて、当時、金州閔東農事試験場に勤務されていたそうです。私の兄もこの農事試験場に勤務中に徴兵検査、入営、沖繩出陣、そして戦死しました。劉さんのご子息は現在東京に住んでおられる

とのことでした。

嚙さんと蓮の大家、大賀一郎博士とのエピソードもありました。普蘭店市街地より約一・七キロ離れた快馬廠会泡子屯の畑の中から、約五百年前の蓮の実が、昭和初期に発見され、大賀博士はこの蓮の実の研究から博士の権威を決定的なものにしたそうですが、この実を大賀博士に紹介したのが嚙さんだったそうです。

楊樹房に残った十家族は、昭和二十年の冬を迎えて不安だらけの中、引揚げ情報が何よりの願いでしたがさっぱり駄目でした。

苦しい生活の毎日、そのうちに少しずつ春も近づいてきたある日、八路军と称する中国人兵士が来て「お前たちは今から馬虎島の松崎農園の田植えに連れて行く。全員すぐに支度しろ。荷物も持てるだけ持ってよい。馬車で送って行くし、食べ物はこちらで支給するが、食器ぐらいいは持って行くこと。鍋釜はいらない」との命令です。いよいよ弟とも永久の別れ。「どうか安らかに土に戻ってください。掘り返されて放り出されるような不憫な目に遭わないように」と祈りつつ、荷

馬車に乗せられ、楊樹房生活のすべてを捨てました。

途中で私は眼鏡を中国人に取り上げられて、不自由な思いを続けなければなりませんでした。他人の眼鏡などを取っても何の役にも立たないので、眼鏡をかけていると生意気に見えたのでしょうか。朝陽寺のYさん一家も私どもと行動を共にしました。その時、奥様はお腹に三人目の子供を宿していました。

馬虎島での生活は、住居はかつて農園の手伝いの中国人の住んでいた所らしく、オンドルの硬い作りで、畳がなくて座布団でも敷かないと座っていられないようで、しかも各世帯も仕切りがなく長屋のような感じでした。

そこでは大人も子供も水田で働かされ、働かざる者は食うべからずといった人使いでした。その馬虎島での生活の中で、妊婦のYさんは予定よりも二カ月も早く出産してしまい、母やHさん、その他お産経験者が大勢いたのが幸いし、助産婦さん代理たちが赤ちゃんを取り上げました。栄養不良の男児で体重が一・五キロぐらいしかなかったようです。体重計もないので正

確なことは分かりません。母乳もあまり出ないので、か細い声でよく泣いていました。しかし生命力はあったようで、引揚げ後も育ちましたが、大人になって知能が足りず、終戦後の食糧事情もあり栄養が十分にとれなかった影響で、小柄で華奢な体で、彼もある意味では戦争犠牲者の一人です。

田植えも終わり、これ以上ここにおいても仕方ないと、八路軍兵士も私どもを解放してくれました。大連への移動をやめて、この地に残留した家族もいました。Hさん一家はいまだに故郷広島に引揚げた様子もなく、未亡人だったHさんは中国人と一緒にあったのでしょうか。

大連には母の妹がいましたが、子供も多いし、とても私ども五人で厄介になることはできず、父の親類におばあさん一人で住んでいる人がいたので、そこに同居させてもらうことになりました。住み家はなんとか確保しましたが次は仕事です。弟は就職先を見つけて出勤し、私は公学校の同僚にアド・バイスをしてもらい、南京豆の販売をすることになり、毎日、大連大広

場で商売をしました。街のあちこちに私のような小商いをする人があふれていました。

大連の人たちは、自分たちの衣料を売り生活していたので、引揚船よ早く来いと日本の土を踏む日を待ち、必死で生計を立てていました。大連市内では、中国人も生活が苦しかったのか、浮浪児風の子供が群れをなし、私どもの小商いの品物をあつと思う間に掠奪していき「今日もやられたわ」と嘆き悔しい思いをしました。彼らの掠奪は中国人商人にも及び、穀物を荷車に積んで運搬しているのを見つげると「わーっ」と襲いかかり、手に持っている小刀で麻袋を切り裂き、穀物が流れ落ちるのをすくって持ち去ります。中にはその襲撃そのものが面白くてやっている者もいたようです。乱世無法状態の昭和二十一年の晩秋でした。

寒さも次第に厳しくなり、街の邦人も売り食いする物がそろそろ底を尽くようになって、一刻も早く日本に帰りたいと願う毎日でした。ある日、私の立ち売りに所い普蘭店公学校と一緒に教師をしていたK先生が、やせ細った見るも哀れな姿で見えました。終戦前は南

山街の官舎に奥様、男の子二人の四大家族で、何不自由ない日々を過ごしておられたのですが、難民となつて働く術を知らず、生活苦から奥様を中国人に売り、二人の子供も売り、最後自分一人さえも食べられずに、私のことを知って「お金を貸してください」と哀願されましたが、私も他人のことどころではなく、明日は我が身であると思いつつも、貸さない訳にもいかず、売り上げの中からながしのお金を用立てました。それから何日ぐらいたつたでしょうか、そのK先生が餓死したという情報に私はがく然としました。そのことを知らせてくれた方から「あのお金は香典になつてしまったのね」と言われましたが、こんな惨めな悲しいこともありました。

昭和二十二年を迎え、やっと引揚げの話も本格化し、順番に開始されて、私どもは三月二十一日ごろでしたか、「辰日丸」という貨物船に詰め込まれて二十日に佐世保に上陸し、生まれて初めて日本の土を踏みました。長い長い終戦からの年月と思ひました。

本籍大阪にといつても、焼け出されて疎開先も分か

らない父の弟もあてにならず、結局母の故郷の福井県に行くことになりました。母のすぐ下の妹だけは満州には行ったこともなく、養女先で暮らしており、生活も安定しているようなので、取りあえずそこへ世話になることになったのです。しかし、急に五人も増えたのですから、叔母の夫も次第に態度が変わつてきました。しばらくして、母の伯母の家に宿替えることになりました。少し田舎ですが、家は広いので離れを貸してもらい、住むことになりました。次男が伯母と一緒に暮らしており、長男は東京で特殊金属の会社を経営し成功していたのです。

そこで暮らしているときに、新京から引揚げていた父の妹が、私を村立中学校の教師にと呼んでくれ、二十二年九月から栃木へ教師として赴任しました。その後、家族は福井県坂井郡金津町嫁威という開拓村へ入植し、木を伐採し株の根っこを掘り出すという、本当の開墾を経験したのでした。両親の一生も実に山あり谷ありで平坦なものではなかったのです。この地にきてから福井地震がありました。この地は地盤が固く

てあまり影響がなく幸いでした。

それ以来、両親は三男の弟とずっと一緒に生活していました。リンゴを植えてみましたが、風が強い所で実が落ちやすく、寒さも満州とは違うので不成功だったようでした。父は九十歳、母も八十九歳四カ月の長寿でした。

私は叔母の所で厄介になり、中学校教師を二学期間務めました。その田舎が性に合わないもので、不義理を承知で東京に行き、もう一人の父の妹夫妻に世話になり郵便局へ勤め、昭和二十六年に結婚しました。結局教師は終戦までの一年五カ月と戦後の七カ月、合わせてちょうど二年間でした。子供が生まれてからは子育てのため内職をして家にいました。

今のこの「うさぎ小屋」は、私が郵便局をやめたときの僅かな退職金を元手に昭和二十七年に買ったものです。当時は七坪の平屋の建売で土地は二十坪強で、三十年前に建て替えました。

昭和五十三年、子育て完了。私が子育てをしているころは赤ちゃんを預かってくれる施設もなく、仕事を

辞めるしかなかったことを考え、教員の資格を生かして、働く母親のために家で赤ちゃんを預かって育児をしてみよう、区で募集している「家庭福祉員」という仕事の認可を受ける手続きをし、昭和五十四年一月一日付で認可され、以来十八年、平成九年三月に退職しました。その間に受託した乳幼児は六十人にも達しました。そして保育事業功労者として世田谷区長から表彰状を授与されました。しかし私の老後はこれからです。

引き揚げて生活も安定してくると、故郷普蘭店への思いが捨て切れなくなってきました。

昭和五十七年に普蘭店会が発足し、大きな会になりました。年一回の総会があり、会報等も発行しましたし、いろいろな情報も知りました。

普蘭店にも残留孤児となった方がいました。Mさん姉弟です。姉弟は釜石で生まれ育っていましたが、両親が相次いで亡くなり祖母と生活をしていました。姉は昭和十四年に、弟は昭和十八年にそれぞれ父の弟に当たるM氏を頼って普蘭店に渡ったのです。普蘭店小

学校に通学していました。姉の方は、楊樹房で亡くなった私の弟と同じ年で、終戦の時は小学六年生、弟は二年生でした。親代わりの叔父さんも暴動後「お前たちは一緒に日本に帰るより、ここに残った方が幸せかもしれない」と友人の中国人に二人を託したそうです。姉弟は叔父、叔母に取りすがり泣きわめいたという事で、M氏も後ろ髪をひかれる思いで壺蘆島から博多港に引き揚げたそうです。その後いろいろと手を尽くして姉弟に呼びかけたそうですが、何の音沙汰もなく時が流れました。

昭和五十七年三月、中国の弟の方から「M叔父を捜してください」と外務省を通して岩手県に連絡が入ったとかでしたが、既にM氏は三十三回忌を迎える故人となっていました。

昭和六十三年五月にM氏の長女Hさんは、この中国のいとこに会うため、普蘭店会有志十四人と共に大連→普蘭店への旅をし、無事いところにも会え、中国人の養母にも会って、その温かい人柄に接し頭の下がる思いがしたそうです。姉の一家は山東省で農業を、弟は

普蘭店で「自来水公司」という会社に勤務しているとのことです。

平成二年十月、東京九段会館で弟さん一家の招待を兼ねて総会を開き、歓迎の一時を過ごしましたが、姉さんは事情があって来日できませんでした。皆さんで気持ちを出し合って饞別をしました。大陸でしっかりと根をおろした二家族に幸多かれと祈るばかりです。

「戦争っていやだね」

三歳児のつぶやきから

神奈川県 戸ヶ崎 英子

三棵樹で乗り換えた車両は、帝政ロシア時代の古風なもので、私は相客のいないコンパートメントに一人で落ち着いた。映画に出てくるような優雅な気分に浸っていた。汽車は小さな振動音を発しながら、静かにそしてゆっくりと走り出し、徐々にスピードを上げていった。